

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

18: クスリの作用、人の作用

千葉晃央

クスリのひろがり

私が勤め始めた頃よりも、最近の方が投薬管理の業務が増えた。特に顕著なのは精神科系によって処方された薬である。主に気持ちを落ち着かせることを目的にした薬が中心となっている。

地域に精神科は複数ある。とはいえ、知的障害、自閉症という領域を背景に持つ患者への薬物療法に関しては、病院、医院ごとに経験に差を感じる。土地柄、大学病院、大きな病院も多いが、そこばかりに多くの利用者が通っているわけでもない。どこの病院に通っているかで「ああ、あそこ」という話がついてくるのはよくあることである。

私が勤め始めた頃には、知的障害者の精神活動部分への処方をしている病院はほとんど聞かなかった。ここ15年ぐらいで一気に広がった。様々な病院の存在とそれぞれの病院に関する話が職員連絡会議によくあがるようになった。

クスリを増やせませんか？

職員が興奮状態から落ち着きつつある利用者の方に声をかけていた。ところが、それがかえってその利用者は気になり再度、興奮状態になってしまった。このやりとりを見ていた職員はいたが、この方のケース担当をしている職員は今の場面をみていなかった。そして、本人の興奮は収まらなくなってしまった。このような状態の時に「気持ちを落ち着かせる」薬をケース担当は飲むことを提案した。そのように本人、家族、主治医と話しができていて、従ったものである。結局、飲むことになった。

最近では、調子を崩した利用者があると

「薬増やせませんか？」

福祉施設での職員同士の会話にこんな会話も普通に出てきた。一番に思いつく対策が薬の量なのである。

これでは、薬が効いたか？落ち着いているか？というところにばかり焦点が当たる。しかし、対人援助職であるならば、まず先の場面でいうならば「職員の関わり」に関して焦点を当てなくてはならない。

どの様なことを話しかけて再度興奮したのか？相手が何をしているときに声をかけ

たのか？声の大きさはどうだったのか？話しかけた内容はどうだったのか？どの方向から声をかけたのか？話しかけた時の表情はどうだったのか？これまで似たような状況で話しかけた時の反応はどうだったのか？…考えることはいくらでもある。薬という手立てが遠かった頃の方がしっかりと援助職の利用者に対する関わりの質について議論があった。そこへの考察があった。

今回の場面を、あるドクターに話すと「そう、この頃は同じことが病院でも起こっている」と話しておられた。病院では医者ではなく「看護師」が「先生！あの患者さん調子が悪いので、お薬増やしてくれませんか」と簡単にいうようになったそうである。

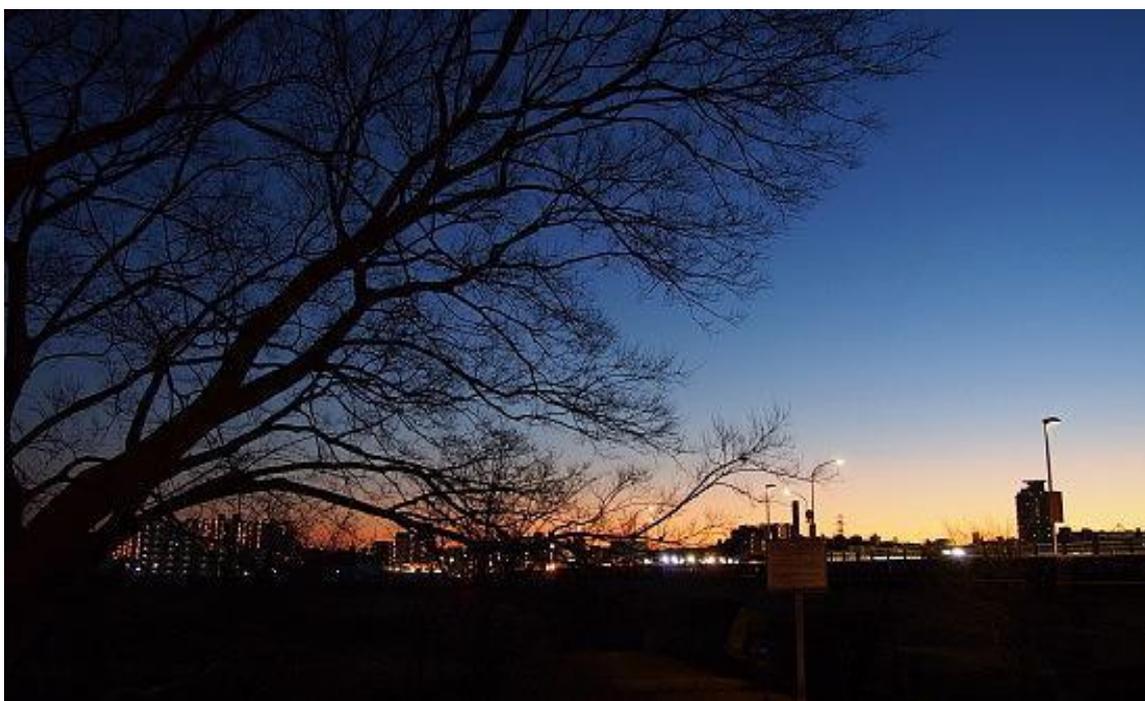
「看護職こそが病院での治療を中心とした生活に安心をもたらすよう関わっていくのが仕事ではないかと言うんですがね…」と話しておられた。

関わりのせいではない！

「私たちの関わりのせいではない！」という見方もある。そういう時には、脳のはなし、障害のはなし、病気のはなしが接近してくる。「体」の問題とする側面である。そういう事実もあるだろうし、その事実を特に扱うことを好む方々もおられる。私は肉体的な側面を扱わないというわけではない。対人援助職としては援助という関わりが主要なチャンネルなので関わりの部分でできることを精一杯追求し続けるのが、まずは私の持ち場と考えている。

「福祉」ではなく「社会福祉」

知的障害をもったご家族の方々の薬への抵抗感はかなり強いと以前は感じていたのが印象に残っている。そのあたりも精神的な部分での服薬が時代と共に広まったのと





連動しているとは思う。しかし「利用者に薬で変化を」というあたりは社会福祉における援助技術論の歴史からみると「われわれの仕事は何なのか？」を考えざるを得ない。福祉職としての独自性はどうなるのだろうか？人は「社会」で生きる。「福祉学」ではなく、「社会福祉学」であり、福祉に関する関わりは「ソーシャル」ワークである。心理面、生理面、社会面という3領域を複合的に考え、そして全人的にとらえる立場である。この独自性は失われかねないともいえる。

「人」という他者に影響を与える存在として機能する。これが問われている。知的障害者の労働現場で職員が担う機能の問題である。それはカウンセリング機能、グループワーク機能、ソーシャルアクション機能、社会資源開発機能などがあげられるだろう。人と人が出会うところで起きること、人と人が関わることでの影響を大切にしたい。

退職しないことが一番の利用者の福祉

そういう意味では職員も同じである。私は大学卒業後、ずっと同じ社会福祉法人に勤務をしている。しかし、長い職業人生では転職を考えたことがないわけではない。その時、「もし迷っているのなら、退職しないのが一番利用者のためになる」というアドバイスをいただいたことを思い出す。「自分は利用者の方々によりサービスを提供したいから転職を考える」という「向上心からの転職意志」を持つ人もたくさんいる。私もそうだった。転職後、新しい場所、新しい集団、新しい価値観、そして経験は一番下というアウェイでも力を発揮していくのは大変で、時間がかかる。それよりも自分がいる場所の変化や可能性を探るのは、これまでの経験と自信の上での取り組みである。どちらが安心する利用者が多いかと

いう側面であえて考えると後者であることは明白である。

福祉職は芸人であれ

熱心な先輩が長年いることは本当に後輩にもたくさんの選択肢をもたらしてくれる。その経験と可能性の幅を背景に支援をするのであって結果、利用者のためにつながる。

私にもたくさんの先輩がいる。働きながら大学院に行った方、海外に研修に行った方、海外に留学した方、レッスンができるくらい音楽に長けた方、対人援助の資格をたくさん持った方、モノなら作れないものはない方、似顔絵が上手な方、企業との信頼を得続けている方…などなどあげ出したら終わることができない。先輩はいつまでたっても先輩である。そういう方がいることでそれを学び、その影響を受けることができ、現場が豊かになる。自分たちがいる援助職チームの可能性の幅が大幅に広がるのである。

ある先生は「職員は芸人になればいい」と思っていると言っておられた。サラリーマン、店員、工場勤務だけでなく、世の中には、さまざまな世界があり、それを様々な活動やそれにまつわる仕事をしている人もいることも利用者に伝えられるのも理由であるとおっしゃっていた。

知的障害者の労働現場も同じで将来の就労という選択肢を持つ利用者を対象にしている。援助職という「存在」としてできることである。さまざまな先輩援助職がいることで後輩の援助職も自分が今から向かう道が何かをより具体的に考えることができ

る。

それが労働としてだけ、仕事としてだけでなく、援助の仕事を考えない層も巻き込んでいく上で訴えるものがあるのではないかと。対人援助の仕事は自己実現の手段であるという援助職を育てる可能性も広がってゆくのではないかと。

人と人が関わる、人と人が作用し、影響を及ぼすのはそういうことではないかと考えた。

(写真：橋本総子)

BACK ISSUES

倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月

触れる 16 2014年3月

情報の格差 15 2013年12月

20年前のノートから 14 2013年9月

そうじのねらい 13 2013年6月

個別化の暗部 12 2013年3月

グループワークの視点 11 2012年12月

実習生がやってきた！ 10 2012年9月

月曜日のせいやな 9 2012年6月

所得を決める福祉職？ 8 2012年3月

世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月

この現場へのたどり着き方 6

障害を持つ友達と過ごすとは？ 巻末座談会

2011年9月

旅行がない！ 5 2011年6月

職員の脳内回路 4 2011年3月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010年12月

利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月

障害者自立支援法で不景気に！？ 1 2010年6月